

# 平成23年度資源評価票(ダイジェスト版)

マチ類

アオダイ *Paracaesio caerulea*

ヒメダイ *Pristipomoides sieboldii*

オオヒメ *Pristipomoides filamentosus*

ハマダイ *Etelis coruscans*

系群名 奄美諸島・沖縄諸島・先島諸島

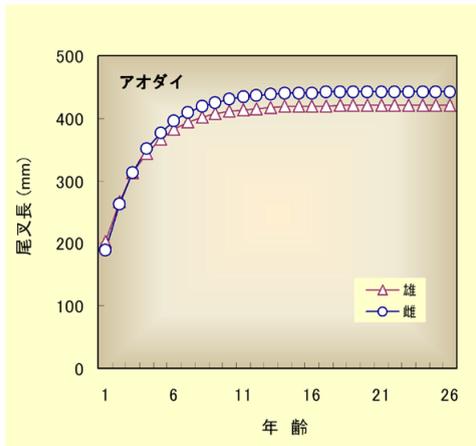
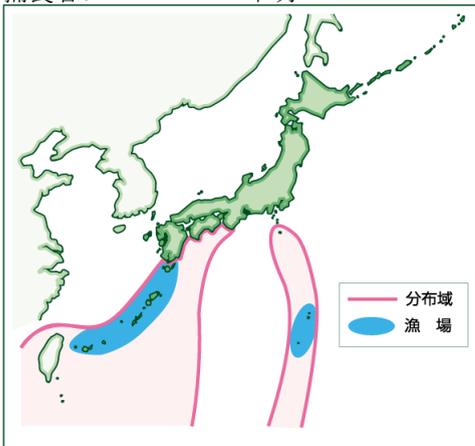
担当水研 西海区水産研究所



写真はアオダイ

## 生物学的特性

寿命:	不明
成熟開始年齢:	アオダイは3歳(50%)、5歳(100%)、ヒメダイは3歳(50%)、5歳(100%)、オオヒメは3歳(50%)、5歳(100%)、ハマダイは10歳(50%)、17歳以上(100%)
産卵期・産卵場:	アオダイは4~8月、ヒメダイ・オオヒメは5~7月(盛期)、ハマダイは4~11月
索餌期・索餌場:	不明
食性:	アオダイは大型の動物性プランクトン、ヒメダイとオオヒメは魚類やカリボヤなど、ハマダイはイカや魚類
捕食者:	不明

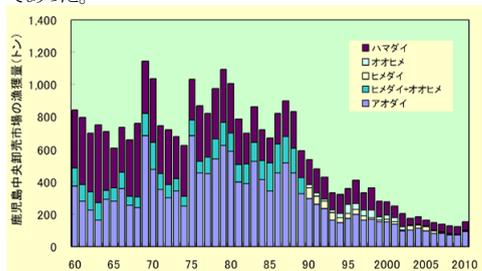


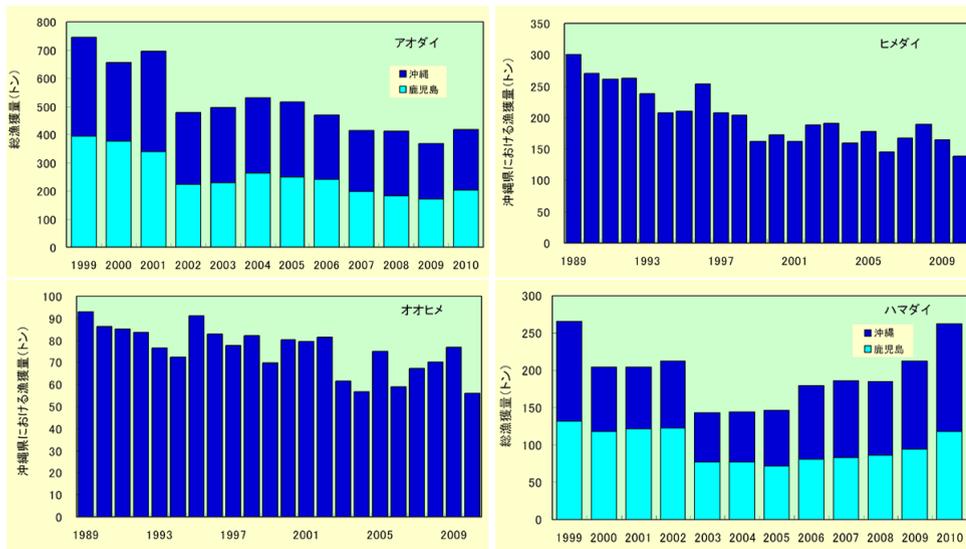
## 漁業の特徴

水深100m以上の深海底魚一本釣りによる漁獲が多く、延縄でも漁獲される。周年操業する漁業者が多く、ソデイカ漁(漁期11~4月)との兼業も行われている。1航海当たりの操業日数は5トン未満の小型船で日帰りまたは2~3日、5トン以上の船で1週間程度。

## 漁獲の動向

鹿児島中央卸売市場のマチ類4種合計の水揚げ量は、1988年まではおよそ800トン前後で増減を繰り返しながらほぼ横ばい状態で推移していたが、1989年~1994年に急減し、1995~1998年には400トン前後で推移した。1999年以降は緩やかな減少傾向が続いており、2010年の水揚げ量は若干増加したものの、2000年のおよそ半分の154トンであった。



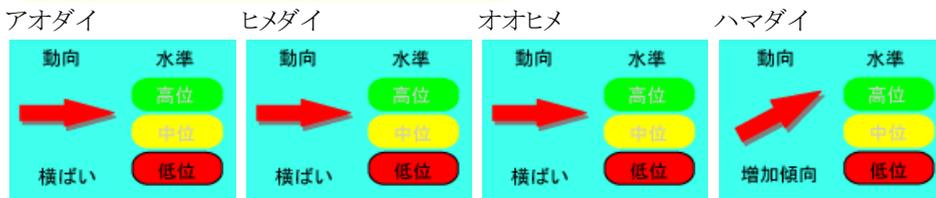
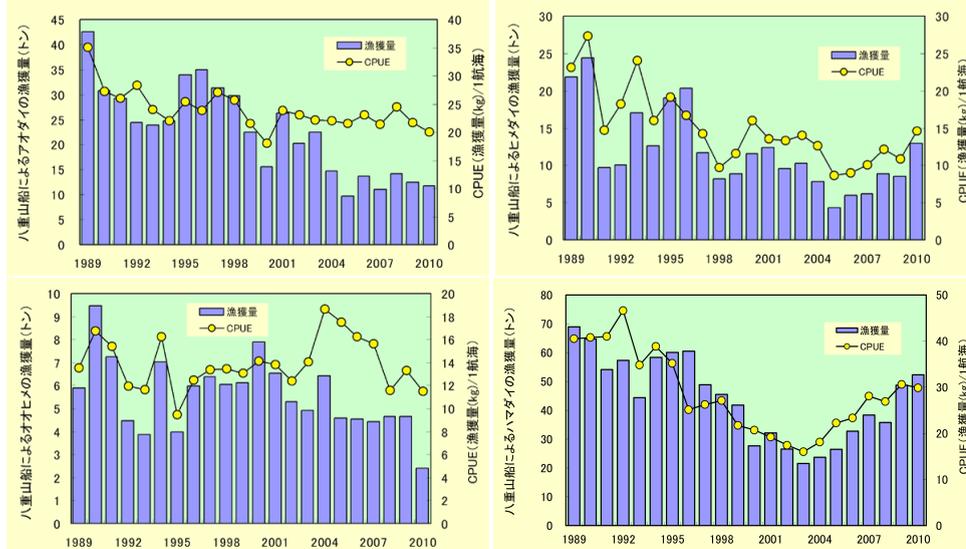


**資源評価法**

鹿児島県・沖縄県の主要港に水揚げされるマチ類の漁獲統計より、魚種別およびマチ類全体の漁獲量の経年変動の傾向を検討した。また、沖縄県漁連に水揚げされる大型標本船13隻のマチ類および八重山漁協所属のマチ類船全体の漁獲量と漁獲努力量の情報を収集し、過去22年間の傾向を検討した。また各種の年齢別漁獲尾数を推定し、それらを用いてCPUEの相乗平均でチューニングしたコホート計算を試行し、資源の動向の参考とした。

**資源状態**

マチ類全体の漁獲量は過去50年の間に大幅に減少していることより、資源水準は低位とした。アオダイにおいては近年5年の漁獲量・CPUEの相乗平均、資源量の動向等がほぼ安定で推移していることより、動向は横ばいと判断した。ヒメダイはCPUEの相乗平均および資源量の推移は若干増加傾向を示しているが漁獲量はほぼ横ばいであることより、動向を横ばいと判断した。オオヒメに関しては2010年は全体的に漁獲量は減少したが、近年5年の漁獲量はほぼ安定で推移していることより、動向は横ばいと判断した。ハマダイは漁獲量・CPUE共に増加傾向であり、さらに試算した資源量も近年増加傾向で推移していることから、動向は増加と判断した。



**管理方策**

2010年4月より第2期資源回復計画が公表され、奄美・熊毛海域では周年保護区を4区と期間保護区を13区、沖縄海域では周年保護区を1区と期間保護区を4区設置したことに加え、漁獲サイズ規制等も開始し、保護区内のみならず海域全体の漁獲圧を下げる方策が実施されている。また、沖縄船籍のマチ船に対しては第1期資源回復計画終了と共に解禁された保護区への入域回数制限も実施されており、今後県外船への適用も検討されている。

**資源評価のまとめ**

- マチ類4種の資源状態は低位水準、動向はアオダイ、ヒメダイおよびオオヒメは横ばい、ハマダイは増加傾向
- 近年ハマダイの漁獲が好調なことから、ヒメダイ・オオヒメ中心の漁獲から、ハマダイ中心の漁獲へシフトする傾向がある

**管理方策のまとめ**

- 資源水準の回復のためには漁獲努力量の削減が必要
- 2010年4月より保護区を18区から22区に拡大した
- 保護区以外においても、漁獲圧を下げるため漁獲体長規制を実施している
- 解禁された保護区での漁獲制限を早急に検討する必要がある

執筆者: 青沼佳方・名波 敦・鈴木伸明

資源評価は毎年更新されます。